



異文化理解・国際協力・マラウイ2009

広島県立因島高等学校

担当教科：地歴科課題研究・地理A・日本史B・倫理・世界史A、時事問題

木村 賀代

◆実践教科：地歴科課題研究 3年生(8名) ◆対象学年：生徒による全校発表 ◆対象人数：全生徒・職員

カリキュラム

◆実践の目的

- ・マラウイの現状を知る。
- ・衣文化、食文化の違いを体験し異文化を理解する。
- ・マラウイで実施した生徒のアンケートなどを通してマラウイと日本の共通点・相違点に目を向け、世界の多様性を認識する。
- ・青年海外協力隊の活動を通して国際協力を身近に感じる。
- ・国際協力とは何か、どうあるべきか考えるきっかけにする。



- ・生徒自身が研究し考察したことを全校・全教職員に発表し、より多くの人たちの異文化理解への意識を深める。

ココがすばらしい!

生徒自身がマラウイについて調べ、アンケートを分析し、発表することで、生徒の自主性を引き出した。

授業の構成

	年間カリキュラム	内容	使用教材
4月	課題研究テーマの選択 年間予定策定	以下の課題から生徒が研究テーマ決定 「異文化理解・国際協力」「三国志について」「裁判員制度について」「イスラムとは」	インターネット
5月 ▼ 7月	マラウイについて	(1) 国の概要・・・位置・文化・言語 (2) 言語について・・・チェワ語 (3) 民族	インターネット ・日本マラウイ協会 ・MALAWI
9月	食文化	(1) 「シマ」調理 (2) 「シマ」について	
10月	アンケート	(1) アンケート集約 (2) 分析 結果について考察する (3) グラフ作成	・マラウイでとったアンケート ・因島高校でとったアンケート
11月	青年海外協力隊の人たち	(1) JICAについて (2) ODAについて	インターネット JICAホームページ
	生徒による全校発表		パワーポイント
12月	まとめ	全校発表感想集約	

1 「異文化理解・国際協力」のテーマ選択について

まず、課題研究については、3年次生徒全員が「国語」、「地歴公民」、「理科」、「保健体育」、「外国語」、「芸術」、「家庭科」、「情報」、「工業」、「福祉」の講座からいずれかを選択する。

今年度の「地歴公民」の選択者は8名であった。その8名でそれぞれが興味のあるテーマを設定した。

本来ならば生徒自身から興味・関心のあるテーマを引き出さないとはいけなかったのだが、今回は私が夏にマラウイに行くこともあり、「異文化理解・国際協力」のテーマについては、私の方からテーマを設定し生徒を割り当てた。生徒に対し、最初は乗り気ではなくても調べていく中でアフリカの現状や課題を見つけ出し興味を持ってくれば良いのではないかと思ひ、半ば強制的に振り分けた。

2 経過

①マラウイについて

アフリカが国名なのかどうか定かではない生徒たちなので、場所の確認から丁寧に行った。調査項目についてはこちらから指定し、それに従って全員がインターネットで調べるという方法をとった。調査項目の中でも生徒たちの興味を一番引いたのは「チェワ語」であった。彼らは、自分たちでいろんな言葉を調べておもしろがっていた。

1学期中には発表内容の大枠を決め、パワーポイントを作り上げており、その中に私がマラウイでとってきた写真を入れ込むのを期待して「あとはここに先生が撮ってきた写真を入れるから、いっぱい写真撮ってきてよ」と楽しそうに話していた。

②アンケートについて

マラウイで実施するアンケート項目が決まったので、事前に我が校の生徒たちにもアンケートを取った。それと同時に生徒たちにマラウイを身近に感じてもらうため、「自分だったらマラウイの高校生に何が聞きたいか考えよう」と投げかけた。質問事項を英語に訳したり、「ほんとに聞いてきてよ!」と私に念を押したりと、少し因島高校生とマラウイ高校生の距離が近くなった気がした。

2学期はマラウイで実施したアンケート結果の集約に時間を使った。生徒たちは、このアンケートの集約を通して予期せぬ驚きがあったようだ。今までマラウイに興味を示さなかった生徒たちが、このアンケート結果に強い興味を示したということである。自分たちが思いもしなかった答えの連続に、生徒たちは心の底から感動しているようだった。特に生徒を驚かせたのは『1000クワチャあったら何に使いますか』と『一番大切に思っていることは何ですか』という2つの問いかけの答えが自分たちの感覚と全く違っていったということだった。『1000クワチャ〜』の答えは、殆どが「学費に充てる」というものだったこと。『一番大切に〜』では「Education」、「To worship the true god」という答えが圧倒的に多かったこと。そしてそれぞれの中に「Help my parents」、「To pay for poor people」と「To be true one who can help other people」いう答えを見つけた時、その感動を「この人たち、ハンパねえ!(とてもすごい)」と何度も何度も繰り返して表現していたのが忘れられない。

アンケート項目 (日本、マラウイ共通)

1. 一番好きな科目は何ですか?
2. 今一番楽しいことは何ですか?
3. 今一番欲しいものは何ですか?
4. 好きな国に連れて行ってあげると言われたら、どこへ行きますか?
5. あなたの将来の夢は何ですか?
6. 今、10,000円(1,000クワチャ)あげると言われたら、何に使いたいですか?
7. あなたが今一番大切に思っていることは何ですか?

③青年海外協力隊について

インターネットのJICAホームページで調べるように指定した。調べる内容については青年海外協力隊にどのような職種があるのか調べるため、「職種」に絞った。その上で「自分だったらどの職種で参加できるだろう」と投げかけておいた。その後、実際の協力隊員の活躍を紹介した。青年海外協力隊員についての項目は、私が現地で見たとことを生徒に伝え、生徒はそれをパワーポイントにする、という作業を行った。

3 全体を通して

課題研究については、最初から全校発表を実施することになっており、4月当初から生徒たちは「発表」を意識して進めていった。

また、「教師海外研修」とリンクさせるというのが私自身に強くあったため、生徒の自主性であるとか、生徒の内部からわき出てきた疑問、といったようなものは当初ほとんどなかった。しかし、こちらがテーマを設定しそれに生徒が向かい合うことで、未知の世界に対する素直な反応を引き出すことができたとともに、「知る意欲」を後押しできた。

生徒による全体発表

生徒のマラウイ調査の集大成と言える発表の内容を以下にまとめた。

【1】 マラウイってどんな国？



①僕たち地歴公民科課題研究グループは「異文化理解・国際協力」というテーマを設定しました。マラウイという国を選んだのは、この研究グループの担当の先生がこの夏マラウイに研修に行かれたことが大きく関係します。僕たちが調べたマラウイと、先生が実際行って体験してきたマラウイを抱き合わせることによって、マラウイを通して異文化理解・国際協力について一緒に考えたいと思います。

2 マラウイとは？！

- ・アフリカ大地溝帯に位置し、マラウイ湖の西岸にある南北に細長い国。
- ・幅は90-161km南北の長さは900kmに及び。
- ・国土はほとんど高原上にあり、マラウイ湖が大きな窪積を占
- ・北・北西をタンザニア、東・南・南西をモザンビーク、西をザンビアの国境と接している。
- ・チェワ族が主流。
- ・マラウイは世界遺産国のひとつである。

マラウイの地理

面積 11万8484km²(北海道と九州を合わせた面積)
首都 リロングウェ (人口約4万人、1995年)
気候 熱帯性気候、乾燥は少ない。
気温 夏：17度～29度 冬：7度～23度

国土はほとんど高原上にある。
マラウイ湖の面積が国土の15%以上を占めており
国土の5分の1が湖や川などの水域である。



最初はマラウイの国の概要から発表します。マラウイはアフリカ大陸の南東部、アフリカ大地溝帯に位置するとても小さい国です。アフリカと言えば「野生の動物」「サバンナ」というイメージですが、このマラウイにはそのようなサバンナはありません。かわりにマラウイ湖というとてもきれいな湖が国土の15%をしめる自然豊かな国です。公用語はマラウイの主な民族であるチェワ族の言語、チェワ語と英語です。

【2】 マラウイを体験しよう！

5 文化(衣) 女性の巻きスカート

～チテンジ～



次にマラウイの人たちが着ているものを紹介します。マラウイの女性は「チテンジ」と呼ばれる巻きスカートをはいています。実際に○○君たちにはいて貰っています。マラウイの女性たちは色とりどりのチテンジを巻いていて、とてもおしゃれです。中にはムタリカ現大統領の顔がプリントしてあるユニークなチテンジもありました。

6 文化(食)



マラウイの主食は「シマ」と呼ばれるとうもろこし粉をお湯で練ったものです。シマ作りは女性の仕事で、おいしいシマを作れるということがいいお嫁さんの証だそうです。今日はこの「シマ」も作りました。ぜひ試食してみてください。

【体験コーナーのポイント】

- ・「シマ」の試食ではチテンジを巻いた生徒がフロアに降りて生徒たちの中に入り、試食してもらった。試食した生徒にはすぐにインタビューし感想を聞いた。



【3】日本文化の紹介



マラウイは人口の3分の2以上の人々が1日1ドル未満で暮らしているという世界の最貧国の1つです。そのため日本をはじめとする多くの先進国がこの国に様々な形で支援に入っています。

お金を出してインフラ整備に力を入れている国、機関もあれば、日本のJICAのように技術援助にしまりその国自身の経済的、精神的自立を後押ししているところもあります。国際協力だ、支援だという前にまず実際のマラウイを知ることこそ大切だ！と僕たちは考えました。

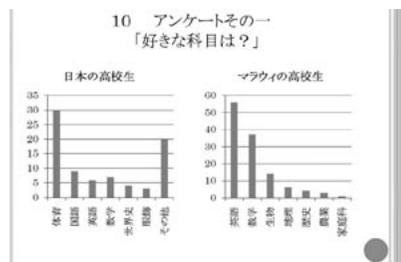
ここからは先生の体験を紹介しながら、それに僕たちの意見・感想を乗せていきたいと思います。これは今回の研修で先生たちがマラウイの高校生に日本文化を紹介しているところです。



因島高校書道選択の人たちにも協力してもらって僕たちが書いた書をマラウイの高校生に届けました。これがその様子です。自分の書いた字が写っている人もいないのではないのでしょうか。生徒さんたちは書かれている字の意味を熱心に聞いて、大切そうに持って帰ってくれたそうです。今でも自分の書いた字が、マラウイの小さな村の家に飾ってある、と思ったらそれだけでも不思議な気持ちになりませんか？

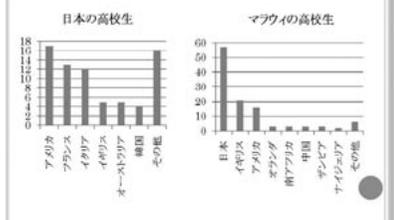
【4】アンケート比較

今回の研究の中で僕が一番興味を持ったのが日マ高校生の意識アンケート結果です。先生達が日本文化などを紹介した高校で、僕たちと全く同じ質問をしてきました。これがその結果です。



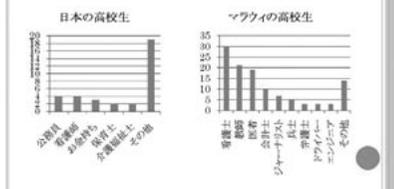
因島高校生は体育が圧倒的人気ですが、マラウイの高校生は一位英語、二位が数学です。この学校に通う生徒たちは英語が母国語ではありません。しかしマラウイは公用語が英語で小さい時から英語を学んでいます。日本の高校生よりはるかに上手に英語を話すことができます。英語に対する意識の高さがこのアンケートにはよく表れていると思いました。

11 アンケートその二
「行ってみたい国は？」



マラウイの生徒は6割近くが「日本」をあげてくれています。私たちはマラウイを知らないのにマラウイの人たちは日本に行ってみたい、と望んでいる、不思議な気持ちがあったのと同時にとてもびっくりしました。マラウイの人たちにとって一番身近な外国人が日本人ということなのでしょう。

12 アンケートその三
「将来就きたい職業は？」



1位看護師、2位教師、3位医師です。現在マラウイに足りない分野の職業に就いてこの国をなんとかしたい、そんな気持ちがあるのではないのでしょうか。実際今回先生が視察された中に教員養成学校があり、そこの生徒に「あなたはなぜ教師になりたいんですか」と質問したところ、「僕の国は貧しい、だから僕が先生になってこの国の役にたきたい」と答えられたのだそうです。

そして、今回は発表しませんでしたでしたが、この質問の他に「1,000クワチャあったら何に使う？」と言う問いに、多くの人が「貧しい人たちのために使う」と答えていました。僕はこれにとっても感動しました。僕たちの答えは、服を買う、とか好きなものを食べに行く、とか友達と一緒に遊びに行く、といった自分のために使うものがほとんどでした。僕にはこんなことは思いつきもしませんでした。この答えを見て「はんばねえ」と思っていました。このアンケートを通して、今まで遠かったマラウイがとても近くに感じられたのと同時に自分たちの知らないことがたくさんあるのだなあ、と実感しました。



【青年海外協力隊】

アンケートの「行ってみたい国は？」で日本がダントツ一位だったマラウイの高校生ですがその裏には青年海外協力隊の人たちの影響があることはいうまでもありません。ここからはいろんな分野で活動をされている協力隊の人たちを紹介したいと思います。
※どの分野で活動しているのか明確にすることで青年海外協力隊の活躍が多岐にわたることを実感できるように工夫した。

⑭長田隊員(理数科教師)

大学を卒業してすぐマラウイに赴任したそうです。長田隊員のおかげで日本の知名度がグ〜と上がっていました。

⑮昆(こん)隊員(体育教師)

この学校の生徒に「なぜ先生になりたいの？」と聞いたら「僕たちの国は貧しい。だから僕は先生になって少しでもこの国の発展に力を尽くしたいんだ」と言いました。

⑯小川隊員(作業療法士)

「やれることを精一杯やるだけです。」と話された、控えめな謙虚な人でした。

⑱高岡隊員(村落開発普及員)

ンパレレ村という村でダンスショーを売りにして村おこしをしよう、というプロジェクトを引き継いでいました。なかなか思うようにいかずジレンマと戦いながら淡々と活動しておられました。

⑳田尻隊員(幼稚園教諭)

「最近嬉しかったことは？」と聞いたら「病気をした時、近所のお母さんたちがお見舞いに来てくれて私の身体を心配してくれたこと」と答えてくれました。



【まとめ】

マラウイの人口の3分の2は1日1ドル未満で暮らしています。このマラウイには日本だけでなく世界中の先進国が支援に入っています。しかし実際のマラウイは1ドル未満で暮らしている、という悲惨さみたいなものは感じられません。餓死者もいません。食料自給率は100パーセントを越え、今は余剰物を輸出することもできています。「『WARM HEART OF AFRICA(アフリカの温かい心)』と呼ばれるマラウイの温厚な人々に接したとき、支援とは何なのか考えさせられた」と木村先生は言っていました。僕たちも国際支援のあり方を考えるいい機会になりました。国際協力とは、まず相手を知ること。

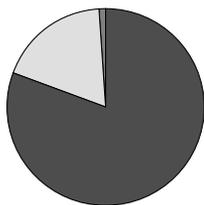
今回マラウイという国を調べなければわからなかったことがたくさんあります。アンケートの結果を見ても日本と同じこともあったし、全く違うこともありました。共感できる場所もあったし感動する場所もありました。「シマ」を食べましたが、おいしいと感じることはできませんでした。でも僕たちがおいしいと思う日本のお米をマラウイの人たちが食べてもおいしいと感じないかもしれません。

アンケートの結果を見て僕たちにはない感覚をもっているマラウイの高校生は本当にすごい、と感じました。

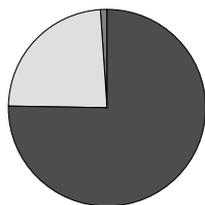
まずお互いを知ること、そしてお互い違うということを認識すること、その違いをそのまま受け入れることができる心の豊かさを持つこと。その上で先進国に生まれた僕たちのできることをする。それが僕たちの考える国際協力だと考えています。

【発表を受けて、生徒の反応】

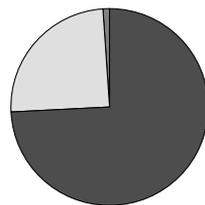
①大きな声ではっきり話し、よく聞こえた。



②発表する時の視線、姿勢、表情がよかった。



③課題研究の内容がよく理解出来る発表だった。



■A(75人) □B(17人)
■C(1人) □D(0人)

■A(70人) □B(22人)
■C(1人) □D(0人)

■A(69人) □B(23人)
■C(1人) □D(0人)

■Aすごく良い □B良い ■C普通 □D悪い

感想

発表方法について

- ・観客向けの試食があったりして、工夫されていた。
- ・衣装を着て発表していたので、楽しんで見る事が出来た。
- ・真面目な部分と盛り上げたりする部分のギャップがとても面白かった。
- ・実際の写真等をたくさん取り入れていてとても分かりやすかったと思う。
- ・マラウイの高校生のアンケートがよく出来ていたと思う。
- ・シマは試食してみると、案外食べられたのでびっくりした。
- ・実際に料理も出てきて楽しい発表だった。
- ・シマの匂いは美味しそうだった。ちょっと興味が持てた。

発表内容について

- ・色々な事を考えさせられて勉強になった。
- ・マラウイという国を初めて知った。
- ・食文化が面白いと思った。
- ・エイズが多いという事でとても心が痛んだ。
- ・異文化理解が少しでも出来てよかった。

全体を通して成果と課題

生徒による全校発表という形が取れたので因島高校全生徒、全職員がマラウイのことを認識できた。

青年海外協力隊についても興味を持つ生徒が増えた。後日「先生、この前テレビでマラウイのことやってたよ」と2、3人の生徒が報告してくれた。今まで聞いたこともなかった国が身近に感じられるようになってきていると思っている。ただ「見せる」というところに重点を置いたためどうしてもおもしろいところをピックアップしてしまったので(シマを食べる・チテンジを見る)マラウイという国はなんかおもしろそうだけど、というところで終わってしまい、そこから深めるということにはなにくかった。

「異文化を理解する」、「国際協力とは何か」ということまでは思いが及んでもその背景にあるマラウイの現実、アフリカの現実までには今回到達できなかった。これは他の課題研究グループにも同じことが言える。

今後は1つの現象でもそれが起きている背景を様々な側面から考察しようとする視点を持った生徒を育てていきたい。

参考資料

【インターネット】

マラウイ	http://malawi.tripod.com/index.html
日本マラウイ協会	http://www.h4.dion.ne.jp/%7Emalawi/
まらわへく	http://blog.goo.ne.jp/wa9work
アフリカ案内	http://www.rikkyo.ne.jp/web/z5000002/malawi/malawi.htm
4WDで行く南部アフリカ度日記	http://www.yuzurand.com/diary3.html